

被災地における「新しい防潮林づくり」に関する一考察
——「いのちを守る森の防潮堤」と「海の照葉樹林」プロジェクトを事例として——

廣重剛史（早稲田大学）

被災地からはじまった「新しい防潮林づくり」

本報告は、2011年の東日本大震災後にはじめられた、被災住民やボランティアなどによる「新しい防潮林づくり」について考察する。この「新しい防潮林づくり」とは筆者の造語だが、その意味は、林野庁が計画主体となり、クロマツを中心に植樹する従来の防潮林づくりに対して、市民が計画主体となり、タブノキやツバキなどの常緑広葉樹（照葉樹）を中心に植樹する防潮林づくりのことを指している。

2012年6月現在、被災地ではまだ瓦礫の撤去自体も終わっていない場所が数多くある。重機で撤去する必要があるもの以外にも、道路の側溝に溜まり固まったヘドロなど、多数のボランティアの手を借りてもなかなか除去が進まないものもある。そのなかにはアルバムが入っていることもあり、それが東京などに持ち帰られ、写真洗浄の活動に引き継がれている。このように、それはたんに力作業だけでなく、同時に被災者の心をケアする活動でもある。

現在、こうした被災者の「思い」と不可分な、いわゆる「ガレキ」の中から有害物質を除去し、それを防潮林のための盛り土（マウンド）として利用し、沿岸部に「鎮魂と防災の森」を作ろうという計画がはじまっている。発案者は、植物生態学者の宮脇昭氏（横浜国立大学名誉教授）で、推進母体は仙台市輪王寺に事務局を置く「いのちを守る森の防潮堤推進東北協議会」（日置道隆会長）である。

従来のマツの単植による防潮林は、耐塩性は高いが、マツの根が比較的横に伸びる傾向があるため津波に弱く、一部では流木化し被害を拡大した。そのため宮脇氏は、今後は根が真っ直ぐ深く地中に伸びる常緑広葉樹（照葉樹）主体で、林野幅30メートル以上、高さ40メートル以上（盛り土部分含む）の「いのちを守る森の防潮堤」を、被災地の沿岸部南北約300キロにわたって作ることを、震災直後から提言している。すでに仙台市や浦安市、岩沼市、大槌町などでは、市民や企業の支援も得ながらこの方式をモデルとした植樹祭もおこなわれている。

また、宮城県気仙沼市では、「気仙沼市震災復興市民委員会」により「海の照葉樹林プロジェクト」が提言され、このプロジェクトは他の提言とともに、気仙沼市の正式な復興計画に盛り込まれている。このプロジェクトもまた、「照葉樹林」という言葉が示すように、上述の「森の防潮堤」と同様、津波に強い常緑広葉樹を沿岸部に植えようという計画である。しかし、「森の防潮堤」が今回の被災地全体の計画であるのに対して、「海の照葉樹林」はより具体的な地域性を重視しており、気仙沼の地域コミュニティと文化の再生とに、密接に関係している。

現在、筆者はこの「海の照葉樹林プロジェクト」の発案者である千葉一・気仙沼市震災復興市民委員会委員と連絡を取り合いながら、早稲田大学ボランティアセンター（WAVOC）において、この「新しい防潮林づくり」の支援計画を進めている（「海の照葉樹林とコミュニティづくりプログラム」）。支援内容は、被災地に自生する照葉樹の種子や実生を被災住民や学生ボランティアたちとともに採取し、これを早稲田大学に持ち帰って学生や市民たちとともに2～3年間育苗し、数年後にそれらの苗木を気仙沼の防潮林として植樹しようという計画である。

海岸防災のゆらぎ

しかしながら、このような「新しい防潮林」の実現には解決すべき課題も多い。そのうちの大きな問題が、「コンクリートによる防波堤の建設」と、従来の「クロマツを中心とする防潮林づくり」との調整である。

たとえば前者に関して、宮城県は、仙台湾南部沿岸の整備を国に委任する以外は、すべてコンクリートの防波堤で沿岸部を囲む計画を打ち出している。それは、気仙沼市の前浜地区では、基準となる東京湾平均海面（T.P.）より約10メートル高く、また小泉地区では約15メートルも高い巨大な防波堤である。このことは、今回の復興のキャッチフレーズに「海と生きる」を掲げ、漁業を地域の生業の中心としてきた気仙沼の多くの住民たちにとって「海との隔絶」を意味しており、きわめて切実な問題となっている。

たしかにこのコンクリート防波堤は、今回の津波で多くの防波堤が決壊した反省を踏まえ、いわゆる「粘り強い構造」が計画されている。しかしながら、その計画は技術的数学的観点に偏っており、その場所で生活する地域住民の意見が十分に反映されていない。また、宮城県の震災復興計画では、大津波に対する「多重防御」の考えかたから、コンクリートの防波堤と防潮林の組み合わせも検討されている。しかし、それも上記のコンクリートの防波堤計画とどう調整されるのかの見通しが不透明であり、この計画に関心を持っている住民たちからはすでに昨年からの不満の声が上がっていた。こうした軋轢の原因は、国が被災自治体に復興計画の作成を急がせすぎたあまり、計画段階で、住民や市民も含めた合意形成のための議論を怠ったことに求められよう。

また、もう一方の大きな課題である防潮林の植栽樹種の問題に関しても、たしかに林野庁内の検討会の提言を踏まえ、林野庁も防潮林に広葉樹を導入することを一部で検討中である。しかし実際には、たとえば気仙沼市では、クロマツ中心の防潮林計画と市民委員会の「海の照葉樹林」計画とをどう調整するか決着がついておらず、計画実現への足かせとなっている。そのため現在、「海の照葉樹林」では市からの援助が得られないまま、被災した階上地区の私有地などを、住民とボランティアだけで植樹を試みるほかない状況となっている。

「新しい防潮林づくり」の意味

このような海岸防災の考え方の違いには、今回の「復興」に対する考え方の違いが明確に現れているといえる。

なかでもコンクリートの巨大防波堤とクロマツ中心の防潮林づくりとは、行政主導という点から見ても、従来の技術の改良での対応という考え方から見ても、いわば従来の「日常性」の延長線上で復興計画を立案したものだと言いつけることができる。これに対して「新しい防潮林づくり」は、住民や市民主導で発案された計画であり、また、これまで「日本的」と考えられてきた「白砂青松」の海岸風景からの脱却という点から見ても、むしろ従来の路線からの「転換」を強く意識している。

このような海岸防災をめぐる「揺らぎ」の背後にあるのは、いわば従来の「近代的な人と自然とのかかわり方の揺らぎ」であるといえる。

コンクリートの防波堤は、そもそも「富国強兵・殖産興業」のために要請された築港のためにはじまった近代化事業のひとつである。そこに見られるのは、経済成長のために自然を改変して利用するという、自然を「道具」や「支配の対象」としてのみ見る立場である。また、クロマツの防潮林の造営事業は江戸時代が中心であり、その意味でコンクリートの防波堤のような人と自然との隔絶という意識は見られない。しかしながら、それが近代国家意識の形成に利用され、これもまた上からの国土形成の「道具」となっている点を見れば、すでに近代性を強く帯びた「人と自然とのかかわり方」のひとつだといえる。

これに対して、照葉樹による防潮林は、たとえば「いのちを守る森の防潮堤」については、宮脇氏の潜在自然植生理論の考え方に見られるように、人為的に形成された「白砂青松」の景観よりも、大部分の被災地沿岸部の気象条件のもとで本来優勢を占める照葉樹林を植樹し、二・三年後はそれぞれの樹木の成長力に任せて津波に強い森を作るという点で、人間が一方向的に自然を利用するという自然との接し方とは明確に異なっている。

したがって、現在被災地の防潮林づくりで生じていることは、従来の「人と自然とのかかわり方」を見直し、住民主導で「新しい日常」を形成していこうとする動きだと捉えることができる。

そして、その方向性は気仙沼の「海の照葉樹林」においてより明確である。千葉氏によれば、「海の照葉樹林」プロジェクトは、同じ復興計画のなかに含まれている「三陸リアスジオパーク・プロジェクト」と一体のものである。そこには、「三陸」という固有の地質や地形の上に、地域の自然植生である照葉樹を住民やボランティアが植樹し、地域の文化と生活の再生・発展を目指すという、ひとつの大きな志向性が表現されている。それは、地域の「自然についての物語」に基礎を置きながら、安定した意味連関の形成を志向する、新しい「故郷」を創出する運動だと把握することができよう。

「自然の支配」から「自然との共生」へ

以上のことから、「新しい防潮林づくり」は、今回の被災地で生じている「日常と非日常との揺らぎ」の象徴的事例だと位置づけられる。その際、震災以前の「日常」に当たるものが、「コンクリートの巨大防波堤」と「クロマツ中心の防潮林づくり」であり、「非日常」に当たるものが照葉樹主体の「新しい防潮林づくり」である。

しかしながら現在、前者のいわば「震災以前の日常」側のアプローチがいまだ支配的であり、今回の震災を機にその転換をはかる「非日常」側と、「復興」のあり方に関して軋轢や「揺らぎ」が生じていた。あらためて述べれば、その「揺らぎ」の背後にあるものが、近代以降の人と自然とのかかわり方そのものの「揺らぎ」である。

現在、被災地で強く求められているのは、産業の再生と雇用の創出であろう。しかし、被災地が本当に持続可能な社会となるためには、地域固有の安定した文化の再生が不可欠である。そしてそれは、「自然」に対するわれわれのものの見方や価値観、すなわちある特定の「自然観（＝世界観）」から生まれてくる。

たとえば今後の防潮林づくりで必要とされている照葉樹の種子の多くは、気仙沼市の御崎神社のタブノキ林のように、何百年ものあいだ寺社を取り囲んできた「鎮守の森」にある。それは近代化の波とともに多くが失われたが、現在、わずかに残っていたその森が、新たに被災地の再生を支えようとしている。そこにはかつて「自然への畏敬」という世界観があった。したがって、今回の被災地で始まっている「新しい防潮林づくり」には、近代的な「自然の支配」から「自然との共生」への、いわば「世界観の転換」という意味を読み取ることができよう。

参考文献

- 小田隆則、2003、『海岸林をつくった人々——白砂青松の誕生』北斗出版、254pp。
- 気仙沼市震災復興市民委員会、2011、「気仙沼市震災復興市民委員会プロジェクト（別紙2）」
http://www.city.kesenuma.lg.jp/www/fukko_shimin/_src/sc914/8Es96AF88CF88F589EF83v838D83W83F83N83gHP.pdf(2012/06/27)。
- 中島勇喜・岡田稔、2011、『海岸林との共生——海岸林に親しみ、海岸林に学び、海岸林を守ろう！』山形大学出版会、218pp。
- 廣重剛史、2009、「環境問題とボランティア——人と自然との連帯の回復へ」田村正勝編著『ボランティア論——共生の理念と実践』ミネルヴァ書房、279-313pp。
- 宮脇昭、2011、「瓦礫を活かす『森の防波堤』が命を守る——植樹による復興・防災の緊急提言」学研パブリッシング、259pp。
- 林野庁、2012、「今後における海岸防災林の再生について」
<http://www.rinya.maff.go.jp/j/tisan/tisan/pdf/kaiganbousairinsaisyuuhoukoku.pdf>(2012/06/27)。